

## 国家と民族

——平田篤胤の思想と天狗小僧寅吉——

相見 昌吾

### 国家と民族（序に代えて）

近代以後の国家は、ウェストファリア条約（1648・三十年戦争の後の講和条約）の結果誕生したもので、それを主権国家と呼ぶ。（この概念が定着するまで、約百年はかかっている。）主権国家は当然歴史的過程において出現した国家であり、①国家主権、②領土を中心とする領域、③永続的に生活する住民、④統治する政府、という四つの構成要素からなる。主権国家は、国家自体が最上位の権限を有し、領域内に対する絶対性と、他の主権国家との対等性という二面性をもつ。前者からは、絶対主権を誰が行使するかという問題が生ずるし、後者からは、対等性の結果もたらされる紛争の最大のものである戦争を如何して防ぐか、自然に放置して置くのかの問題が生ずる。

ところで国民国家は、フランス革命の結果生まれた概念であり、主権国家を前提に、その主権を誰が行使するかを問題にする。国民国家は、国際法的には主権を人民が持っていることが必要であるが、それは現在では「共和制国家」であり、「立憲君主制国家」でもこれに含まれる。そして国連加盟の国家は、国民国家であるという建前になっている。

当初フランスにおいては、「一にして不可分の共和国」の考え方から国民国家を成立させたが、現在ではそれが揺らいでいる。それは大きくは地域主義の台頭であり、もう一つは「新しい民族問題」即ち移民の問題である。隣のドイツを見ると、領邦国家が国家として統一され連邦国家となり、「民族帰属性」と表現する。ドイツ人はドイツ国籍を持つことと、ドイツ民族

※神奈川大学歴史民俗資料科学研究科前期課程

（フォルク・これは血縁的ニュアンスがある。）に属することが必要である。しかしここでも問題があり、外国人労働者の存在、少数民族の問題が存在する。海を渡ったイギリスでは、ブリティッシュ島の征服の歴史から多数の民族が存在する。一応アングロサクソンによって征服、統合、併合されたように見えるが歴史の刻印は簡単に消えるものではない。その上覇権時代の植民地からの移民問題があり、またアイルランドの独立と分離の問題がある。

一番大きな問題は「民族とは何か」である。通常「民族」は客観的の面と主観的の面からアプローチされる。先ず客観的には「同じ名称や文化的要素、宗教や母語を共有し、共通の起源に纏わる神話や、共通の歴史的記憶を保有する人々の集団が、特定の領域で自らを結合して連帯感を持つ存在」とされているがこれにも多くの問題がある。では主観的にはどうであろうか。主観的であるからいろいろの考え方があるであろうが重要なのは「我々は他者とは違う」という「我々意識」や「我々への帰属の概念」を持つゲマインシャフト的集団として考える。当然これは主観的意識であるので固定的ではなく流動的であるし歴史的な概念である。この二者の基準は互いに不可分な関係にあり、「自生的・文化的」力と、「作為的・政治的」力の拮抗するダイナミックな作用の関係から生まれたものが民族意識とも言えるのではなかろうか。民族意識が殊更強調させるようになったのは近代に入ってからであることに注意する必要がある。

次はいわゆる民族問題であるが、民族問題とは、政治・経済的不平等、文化的差別や偏見に対抗するために、ある集団がある対立に直面

した場合に、自ら有利な解決を図るために民族意識を殊更強調して、国家またはその属する社会に対する反発心を出発点として、民族を意識化したことである。」と考える。日本に民族問題があるかといえば、大和民族と異なる民族は存在しても特に現在、民族問題は存在しないと考えている。これに対して国民国家の枠を超えて反発して文化的なアイデンティティを主張するのがエスニック集団である。この集団は作為的・政治的な力を目指し、これに民族を利用しようとしているものと云えよう。

民族は近代以前にも当然存在した。現代では多民族国家の典型例は、アメリカ合衆国・中華人民共和国であり、近代以前は、バルカンを抱えたオスマン帝国である。私は昔は良かったという復古思想を持っていないし、人間は時間の経過と共に進歩するという進歩史観をも持ち合わせていないので、前近代の出来事でも人間にとって役立つものがあると考えから、ここではオスマン帝国の民族について少し見て置きたい。

オスマン帝国は十三世紀の末にアナトリアの西北部に登場する。その後六百年間も続き帝国は次第に版図を広げ、最大時には、地中海地方を中心に東はイラン、西はモロッコと境を接し、北はハンガリー、南ウクライナ、クリミア、南はスーダン、イエメンを含むものであり、ローマ帝国の最大版図時の四分の三を超えるものであった。オスマン帝国の人々は、多様な宗教・言語・民族に属する人々が互いに交渉、交流をしながら、各自の文化・習慣を保ち生活していた。

先ずこれを宗教から見ると、誰もムスリム・キリスト教・ユダヤ教という三大一神教の何れかに属していた。これから見ると単純なようであるが、その宗派をみるとムスリムでは、スンナ派・シーア派・その分派のドゥールーズ派が存在し、キリスト教は、ギリシャ正教が多いが、アルメニア教会派・コプト教徒・単性論者のネストリウス派それにオーストリアに迫害された

プロテスタントがいた。ユダヤ教には宗派は無く、言語もヘブライ語は日常的には使用されないで独特なものはないが、住んでいた地方の言語を母語とする集団が居る。ビザンツ帝国にいたもの、ムスリム世界で存続していたもの、ハンガリーにいたもの、イベリア半島の亡命者に至るグループが存在した。

言語で云うと、トルコ語・アラビア語を母語とするもの、シリア語・ベルベル語・クルド語・ラズ語・トルコ語をギリシャ文字で表すカラマンル・ギリシャ語・アルメニア語・ブルガリア語・ルーマニア語・セルボクロアチア語・クリムタタール語・ウクライナ語・ハンガリー語・ドイツ語・ラディーノ語・カステリア語・イディッシュ語が使われた。

民族で云うと、トルコ人・アラブ人・ユダヤ人・アッシリア人・アルメニア人・ブルガリア人・ルーマニア人・セルビア人・クロアチア人・タタール人・ウクライナ人・ハンガリー人・ドイツ人等がいる。彼等を繋いでいたものは、従来は、ミレット制であると言われていたが、現在の研究では、それは否定され、イスラム法上の制度によると考えられている。先にオスマン帝国には三大一神教しかないと言っていたがそれは、偶像崇拜宗教は、《コーランか剣か》によって淘汰されるからである。ムスリム以外の「啓典の民」は人頭税を支払うことによって、固有の信仰と生活慣習を保持し、自治生活が出来たのである。近代以前であるから、人頭税を支払うという不平等な面があるが、民族より宗教の力によって国家が保たれていたのである。このような「オスマンの平和」と呼ばれるものは、近代ヨーロッパの思想、ネーション・ステイトによって破壊された。その後の来たものは言語と民族の差異に基礎を置く新たなタイプの戦いの始まりである。そして現在の中東やバルカンにおける民族紛争を克服する手段は未だ存在しないのである。もし我々が狭量な民族主義から離れられるとするならば、民族文化の絶えざる自己実現と創造的飛躍を経由する必要がある

ろう。各民族とも、民族主義が民族の不断の自己超越となるとき、創造的に民族主義を超えていけることが出来よう。

さてここでは戦後蛇蝎の如く嫌われ、超国家主義思想の元兇としてあらゆる罵詈雑言を浴びせられた国学者であり、一面は民俗学者であるといえるかもしれない平田篤胤を取り上げてその特色を考えてみる。

篤胤が生きた時代は、ヨーロッパではウェストファリア条約は成立していたし、フランス革命も終わり国民国家は成立していた。しかし日本は未だ夜明け前であり、篤胤はそれらの事を知らなかったと考えられる。若し知っていたとしても彼の関心はそこには無かったであろう。篤胤は今日の国家も民族学も民俗学も知らないで生きてきた。彼は武士の身分であるが、民間人と同様な立場である。御三家の一つである水戸藩の学者である藤田東湖は、篤胤を評して奇男子と云い、その妄想には困るがその気概には感服している。所詮水戸藩の重鎮であり、既成の公的世界に住む東湖には、篤胤を理解し得ない存在であったであろう。

### 第一節 平田篤胤に対する評価

和辻哲郎は、『日本倫理思想史』下に於いて「篤胤は狂信的情熱の力で多くの弟子を獲得し、日本は万国の素である、日本の神話の神が宇宙の主宰神であるような信仰をひろめていった。この篤胤の性行にも、思想内容にも、きわめて濃厚に変質者を思わせるものがあるが、変質者であることは狂信を伝播するにはかえって都合が良かったであろう。やがてこの狂信的国粹主義も勤皇運動に結びつき、幕府打倒の一つの力になったのであるが、しかしそれは狂信であったがために、非常に大きい害毒の根として残ったのである。」(p674)と幕藩体制後期の安永年間から天保の終わりに生きた人間を戦後の地平から、和辻は遺恨を込めて篤胤を「変質者」・「狂信者」という。少なくとも倫理学者が他人に対して言う言葉かどうか私は疑問にも

つ。和辻のように篤胤を狂人・変質者にしてしまつては、それ以上の議論は停止してしまうので、彼が幕末社会に民衆の生活と密着した地方庶民社会の知識人、農村指導者層に強い影響力を持ちえた理由を明らかにしえないし、明治の社会になり、何故彼の国粹主義者の一面のみが強調され、残存したかも明らかにされない。和辻のような、殆どの進歩的文化人を自称する人々は、ナチスに利用された、篤胤と同じ様な立場にあるフィヒテやハイディガーをどのように評価するのであろうか。

これに対して、折口信夫は、彼の全集第二十巻に収められている「平田国学の伝統」と題された講演筆記の中で、「篤胤先生という人は、果たして世間の人が見ているように、終始貧乏たれた風をして水漬を垂らしながら偏屈なことを言つて、怒りっぽく、まずい物ばかり食べて暮らしていた人、何か恐ろしい浪人をば感ずるような人、そういう風に篤胤先生を受け入れていいかどうか、其れは、私は違うと思います。どうも篤胤先生の学問は、もっと広い気風を感じる、何か非常に大きい、広い掌を以って、学問の徒弟をば愛撫しているような感じがします。(中略)先生という人は『俗神道大意』という本を書いているながら、天狗の蔭間のような子供を捕まえて、一所懸命聴いて、それを疑っていない。事細かく書いている。篤胤先生の学問も疑わしくなるくらい疑わずに、一心不乱に記録を作っている。」(p428)と、折口信夫は、新しい国学を民俗学の転生のなかで篤胤の学問の継承を考えていそうである。民俗学は新しい学問であるので、当然篤胤を民俗学者と云わないが、もともと国学自体が、民俗学的要素を多分にもった学問である。ここで簡単に国学の系譜を見て置く。

国学の系譜は、釈契沖による万葉集の研究に端を発する古学から始まり、その後街田春満が『創学校啓』を著し、加茂真淵は『国意考』『万葉考』を著し、大和心を明らかにする学問として位置付けられ、『古事記伝』を著した本居宣

長により、国学として確立したとされる。荷田春満・加茂真淵・本居宣長を大人と尊称したのは平田篤胤であるが、篤胤は、『古事記』は日本神話や歴史を叙述した一書に過ぎないと考え、『日本書紀』や祝詞や『万葉集』や『風土記』その他外国の神話や伝説・民間伝説をも含めて総合的に研究して、古代の神話や歴史の原像を明らかにしなければならないとして、日本人の魂の考古学を始めたのである。それが篤胤の自ら復元した『古史伝』であり、『古史成分』である。その上篤胤は、民俗学的研究や霊学的・心霊学的研究の先駆者あったともいえる。

## 第二節 平田篤胤の略歴

篤胤は、安永五年（1776）現在の秋田市、秋田佐竹藩の大番頭であった大和田神胤清兵衛の四男として生まれ、天保十四年（1843）に秋田で歿した。彼が後に平田家の養子となる二十五歳のころまでの伝記は不明な点が多い。篤胤は、父親から尋常な柔順な子供とはみなされていなかったようだ。父親からは、下僕のようなあつかいをされたとも伝えられている。とにかく薄幸な幼年時代を送ったと思われる。父親の禄高は、百石ばかりであったから男六人女二人の八人兄弟であったので恵まれた境遇に無かったことは確かであろう。篤胤は、二十歳のとき（寛政7年）脱藩して江戸に出た。殆ど無一文の彼は、平田家の養子になる二五歳までは、生活難との戦いであった。この間大八車の車夫として、あるいは火消し人足として、商店の炊夫として、働いたという。彼が、炊夫をしてそれが終了後、熱心に読書をする姿を知って備中国松山の城主板倉侯の藩士で代々江戸詰であった平田藤兵衛篤穂が養子にした。平田家は、山鹿流の兵学者で家禄は、五十石であった。そして篤胤は、国学者でもあり医者でもあった。

篤胤の最初の著作は、享和三年（1803）に書かれた『呵妄書』である。この書は、宣長の立場から太宰春台（荻生徂徠の弟子、蔵園学派）

の『弁道書』を批判したものである。この書を書くために篤胤は、宣長の著書『直毘霊』・『古事記伝』・『玉勝間』・『初山踏』・『葛花』を読んでいたことは明らかである。篤胤は、その翌年「真菅乃屋」と号して弟子を取り、自立している。ところで宣長は享和元年（1801）に歿しているので篤胤が正式に宣長の門に入ったのは宣長の生前かどうか議論された経過がある。現在では、篤胤は、宣長の生前にはその名さえ知らなかったこと、享和三年に初めて宣長の存在を知りその著作を求め、宣長の学問に没頭し、文化二年三月（1805）に宣長の嫡子春庭に入門の願書を呈し、春庭は、同年六月に入門許可の返書をしたとされる。篤胤は、宣長の死後の弟子である。

篤胤は、篤胤なりの問題関心のもとに宣長を継承し、文化九年（1811）三十七歳のとき『靈能真柱』を著わして、篤胤独自の国学の世界を形成した。その間に門人も徐々に増え彼の主著たる『古史伝』の執筆が始められた。

ここで篤胤の学問の伝播について考えて見たい。彼は入門した門人の「誓詞帳」を残しておりそれを見ることが出来る。文化元年（1804）から天保十四年までを見ると、入門者は五百五十一人であり、武士が百十九人、百姓・町人が四百三十二人、武士を除いて地域的に見ると江戸が五十五人、下総が百十二人、出羽が五十人、越後が二十二人、三河が二十人、そして慶応三年までに千三百三十人、明治九年までには、三千七百人を越す数となっている。信州伊奈谷は『夜明け前』にある通り平田国学で知られているが、門下生は篤胤の存命中は多くない。大体安政年間からであろう。それにしても、下総が断然多い。下総でも、香取・匝瑳・海上の三郡に多く、特に村の有力者である名主・網元・医者・神主が多い。これらの中でも、宮負定雄は有名である。香取郡松沢村（現在の千潟町）出身の定雄は三十歳の時『農業要集』を著しこれをもって篤胤に入門している。彼の特色は、篤胤の学問のうち、死後世界に於ける靈魂の安

定・保証のために幽冥を具体化するための事例追加に努力した事である。定雄は和歌山行きを志、そこで最も信頼した紀州藩士である寺沢立敬、通称三沢明と友人となった。三沢明は弘化元年（1844）桃乃舎塾を主宰するようになり、ここで彼は島田幸安という少年の神医を見つけた。幸安は浄土宗西安寺の小僧となり善寛といった。彼はある時夢の中に白髪翁が出てきて共に雲に乗って紀州花山に行き、その後九州赤山の仙界に入り修行して、幽界と現実界との間を自由に行き来する術を得、現実界においては、医術を業としていた人物である。三沢は、幸安から幽界の話をつぶさに聞き、それを「神界物語」二十巻を著し、これを定雄に送った。ところで彼の寅吉も紀州に行っているの、幸安のような人が出る下地は備わっていたと言わなければならない。定雄はこの後「奇談雑史」を著している。

### 第三節 篤胤の哲学

この『靈能真柱』が宣長門下の間で大きく問題とされたのはこの書が宣長の門人である服部中庸の『三大考』を下敷きにしているからである。尚この『三大考』は、宣長の『古事記伝』の付録として位置付けられている。本居大平（宣長の養嗣子であり学問の後継者）は、『三大考弁』を著してこれを批判している。

ここではこの『靈能真柱』を見ていく。篤胤は古学をする徒は、まず大倭心を固め、その為には霊の行き方の安定を知らなければならないと言う。

霊の行き方を知るためには、天・地・泉における三つの世界形成の事実、神の功德を問題としなければならぬとし、篤胤はここから宣長とは異なる思想の方向性を打ち出している。それは宣長を古典の注釈者とすれば、篤胤は神道神学者、神道世界の構成者である。篤胤は国学者というよりか宗教学者という方が適している。篤胤は宣長を利用しつつ宣長とは別の方向に走ったのである。彼の著『古史伝』は、「古

事記伝」という日本の古史・古伝承を、神道神学的世界として再構築したものである。この作業の特色は、救済論的宗教的要求にあるといえよう。近世の支配的思想であり、知識である儒教は、教と言う字が使われていても元来政治思想であり、支配者側の立場にあるから、人々の魂の救済的関心には答えられないので、篤胤は神道神学的顕幽二元論に立ち、魂の救済に答えようとするのである。「顕事」を朝廷中心の統治に包まれる天皇命の御民としての人倫的行為・生業を意味する概念として捉え、「幽事」は、死後に人々の靈魂が幽冥界の支配である大國主神の処に赴き、その支配に服し現生の類縁者に幸せを齎しつつ、その魂の鎮まる場所が幽界だと考える。篤胤は「顕事」に従属しない独特な「幽事」の概念を導き出した。

この二元論の立場に立つ『靈能真柱』は、服部中庸の『三大考』を主要な前提としている。ところで我が国の神話伝承は宇宙の生成を組織だてて説明していないが、『三大考』はそれを行おうとしたものであり、古典解釈の域を超え中庸の哲学を述べている。天・地・泉を考える場合に地から上方に分離していく天（太陽）があり、下方に分離していく泉（月）であるとし、地上の国が日本であるとする。日月が大地から完全に分離した後、大地を中心にして日月が旋回するようになったと考えている。なお中庸は地動説を知っているので、自分の説と矛盾はしないと云っている。天動説と地動説は天文学の問題であり、どちらが巧く天体の動きを秩序だてて説明できるかが問題である。

篤胤は『靈能真柱』の本文の冒頭で「古学する徒は、まづ主と大倭心を堅むべく、この固の堅在では、真道の知がたき由は、吾師翁の、山誓の根の丁寧に、教悟しおかれつる。此は磐根の極み突立る、厳柱の、動まじき教なりけり。斯てその大倭心を、太高く固ましく欲するには、その霊の行方の安定を知ることも先なりける。云々」<sup>11</sup>という。そして①天・地・泉の成り始め、形、②天・地・泉、たらしめている

神の功德、③我が国が万国の宗国である理由付けである。これらを篤胤は魂の救済と宇宙形成論の中で解決しようとしたのである。

更には我が国が四海の中心であり、天皇は、万国の大君であることを熟知する必要があるとする。そして篤胤自身が「この築立る柱はも、古学する徒の大倭心の鎮なり。」<sup>(12)</sup>としてうちたてた柱であると言う。この立論の根拠は、「古伝」であり、四海の宗国たる我が国に神代以来正しく伝わった「実の説」である。この主張は宣長も同様であるが、宣長の場合『古事記』の記載そのものが基本的根拠である。しかるに篤胤の「古伝」は、「予諸古典に見えたる伝どもを通考へて、新たに撰びたる古史の文」<sup>(13)</sup>とあり、篤胤の主観的要素が入っているように読める。古典・文献学の立場からは、後世の注釈者の依拠すべき根本資料をいかなる理由でも改竄することは許されないけれど、自分の哲学を語るために『古事記伝』の説を遣い、自説を述べるのは問題が無いと考えられる。もしこのような事が許されないとすれば、新しい哲学を打ち立てることは出来ないということになってしまう。これが歴史学と大きく違うところであろう。

『霊能真柱』から篤胤の新説を見てみる。①「夜見といふに黄泉の字をあてたるより、いたく混謬れる説のある。」<sup>(14)</sup>と述べ、ここでは指摘だけであるけれど彼の考え方では死者の霊は夜見の国に行かないという篤胤の持論に繋がる。②「青海原とは、やがて天神の、此漂在国と指し詔へる物のことにて、其は、この国土の雅在しほどの称なる由も、また青海原といふ言の義をも、古史伝にいへるが如し。」<sup>(15)</sup>これは、大国主命によるこの国土の支配権の正統性を主張するためである。③「遥西の極なる国々の古伝に、世の初発、天神既に天地を造りて後に、土塊を二つ丸めて、これを男女の神となし、その男神の名を安太牟といひ、女神の名を延波といへるが、此二人の神して、国土を生めりといふ説のあるは、全く、皇国の古伝の訛り

と聞えたり。」<sup>(16)</sup>といいアダムとイブの話を皇国の古伝の訛りだと言い自分の方に引き寄せる。④「遂に神遊坐かたまりましとは、上の謂によりて、下津国に、神遊坐かんのうぐりむとは為賜いわれひつつも、途より還坐かたまりまして、上件の神々をさえ生坐うまれししかど、かの恥思はす御心の止み賜はで、遂に妖神御許を、下津国に神遊坐かんのうぐりするとのことなり。」<sup>(17)</sup>と。伊邪那美命の「遂に神遊坐矣」とはその「死」を意味しないとされた。これは篤胤と宣長の大きな相違点である。⑤「師翁の説に、禍事の起るは、悉に、禍津日神の霊とのみいはれしは、未委からず。」<sup>(18)</sup>といい「故此神は穢事を甚く悪み賜ひで汚穢の有れば、荒び賜ふなり。」<sup>(19)</sup>と言う。宣長の説々禍事が盛んな時は、禍津日神の心によるもので、正しい神もどうする事も出来ないと考える。》をとると、世の中のいかなる悪も最終的には、人間の責任とは為らないけれども、篤胤説をとると、禍津日神は、汚穢があれば荒ぶるのであり、汚穢をつくるのは人間であるから、人間はその責任を免れることは出来ないという論理になる。篤胤の方が宣長より、人間の主体性を認めている。⑥「凡人も如此生て現世に在るほどに、顕明事にて、天皇命の御民とあるを、死ては、その魂やがて神にて、かの幽霊・冥魂などもいふ如く、すでにいはゆる幽冥に帰けるなれば、さては、その冥府を掌り治めず大神は、大国主神に坐せば、彼神に帰命奉る、その御制を受賜はることなり。」<sup>(20)</sup>と、篤胤は「幽冥」について述べる。彼は、<死者の魂は夜見に行く>という宣長の説を否定するために、伊邪那美命は、死んで夜見の国に行ったのではないとして、理論的には人の生まれる根本因は、産霊神の御霊によるのであるから、人の神魂は夜見などに行く筈は無いという。篤胤は、夜見の国の世界と、靈魂の属する幽冥界とを明確に区別する。そして幽冥界とは、現実の何処にもあるような、地上の生活圏と密接な関係にある世界だとしている。『日本書紀』には、顕事・幽事の表現があるが、この顕事と幽事に対応する概念を篤胤は、どのように考えていたか

が重要である。彼は、「顕事」は現世の統治を意味し、其れに対して「幽事」とは、祭祀を意味する。ところが宣長は、幽事は、神事としながらも、それを神の成す事と解した。そしてこの世界の万事は神によることだが今、現人のなす顕事に対し、それを区別する意味で幽事というのであるとする。篤胤は、「古人もかつてはいはず、師もいまだ考へられざりし説」<sup>111</sup>といい、更に世の中のあらゆる人の君・親・夫・兄に仕え、そのための業に勤めることが、人々にとって顕事だとしている。

繰り返しになるが篤胤の云う顕事は天照大神の子孫が地上に天下って為す政治支配を意味し、更にその支配に属する人々の人倫的行為、彼らの営む生業も顕事とし、顕事概念は現世の行為へと拡大されていくのである。これに対して幽事の考えについて宣長の思想は、神々による地上世界の包括的な支配と、大国主命による朝廷の政治への目に見えない支援を意味している。篤胤の『古史伝』では、天地の生成など造化の道にかかわる神事と、幽冥界における幽事とは明確に区別しているのである。《霊の行く方》は、大国主神の支配する「幽冥」であるという立場に立つ篤胤は、大国主命がその主である霊魂の世界の幽事を主宰し、人は死後に、霊魂が大国主命のもとに赴き、彼に服し、幽冥に鎮まり、現世の類縁者に幸せをもたらすものだと言うのである。彼の幽冥界についての認識は、①天・地・泉の生成とそれらの形態、②それら「天・地・泉」足らしめている神々の功德、③我国が万国の宗国である理由、の三点にある。

篤胤は、死からの霊魂の救済の要求を、宇宙論の構成の中で解決すると言っているのである。これが篤胤の宗教的なところである。

つぎに篤胤の宇宙観を考察する。彼の宇宙観は『三大考』を自分の宇宙観の見本としていることは明確であるので、篤胤は天地の未だ生じない時に、高天原が有るわけがないと謂っている。天御虚空に成った神の御名は天之御中主

神・高御産巢日神・神産巢日神の三神であったという。次に虚空中に、やがて天・地・泉なる一物が生ずる。その一物からまず天となるものが萌えあがり、残部が地となって固まっていく。更に泉が地底に垂れ下がっていく。記紀神話の高天原—中津国—根の国という垂直的三界観が天地の生成過程に具象化されて捉えられている。特に両産霊神は、神々、人間その他万物の生成を司る算出の霊力を持った神として、創造神的性格が強調される。そして神魯企・神魯美命という男女二神と両産霊神は、同一神だとする。篤胤は、産霊神によって人間と天・地・泉を構成する元素とは同一の物によって作られているとし、心魂は天に属する元素によって、肉体は地に属する元素によって作られるとした。儒家流の鬼神論を自分の文脈の中に取り入れているのである。彼は霊魂が天に帰する論理をいながら、生存時と同じ国土に存在する幽冥界を説く。神々が、永久にその社に鎮座するように、人の魂も永久にその墓上に鎮まるといふ。幽冥界は、現世のいずこにも在るけれど、しかし境を異にし、現世の人間にはその世界を見ることが出来ない。人の死後霊魂は、この幽冥界に属し、大国主命に仕え、同時に、同じ質からなる天と往来することも出来るという。篤胤の宇宙論、或は世界観を、擬似普遍的体系と呼ぶ事が出来よう。これをまた汎神道主義と呼ぶこともできるのであるが、篤胤の思想の持つこの汎神道主義的特質は、日本的イデオロギ―と連なる。即ちあらゆる雑多な思想・文化を受容しつつ、そのことこそ世界に冠たる日本精神の優越性の証拠という主張となるのである。

この霊の問題が、宣長の哲学中で一番弱点のある問題であるので、それを中庸と篤胤が補完したと考える事もできる。今度は篤胤の民俗学的要素を見ておく。

#### 第四節 異界の情報提供者寅吉

文政三年（1820）十月朔日暮七つ時、山崎美成の許に、天狗に誘われて年久しい、童（高山

寅吉)が来ているという情報を屋代弘賢によって篤胤に齎される。早速偶々来合わせていた伴信友と共に出かけしていく。篤胤は幽界の事情が分るかもしれないという期待を持ち、篤胤は山崎の許から、強引に寅吉を自宅に連れ帰り、そして異界(幽冥界)に関心がある人々のグループの中に置かれる。このメンバーは、篤胤を中心に塙保己一を助けて『群書類従』を編纂する屋代弘賢・伴信友・佐藤信淵・国友能当・養子の平田鉄胤・薬種商の山崎美成・菟書家である小山田与清・曲亭馬琴等が居る。平田篤胤の『仙境異聞・勝五郎再生記聞』によると寅吉は「憎気なき尋常の童子なるが、歳は十五歳なりと言へども、十三歳ばかりに見え、眼には人相家に下三白と称ふ眼にて、凡よそ大きく、所謂眼光人を射るといふ如く、光ありて面貌すべて異相なり。脈を診、腹を診たるに、小腹実して力あり。」<sup>(12)</sup>とある。

寅吉は江戸下谷七軒町にて父は越中屋与惣次郎といい彼の二男で文化三年(1809)十二月晦日朝七つ時に生まれている。寅吉の生年月日は寅ノ年・寅ノ月・寅ノ刻である。父は三年前に亡くなり、兄莊吉十八歳が少しの商いをして、母と幼き兄弟を養っている。寅吉は篤胤が神道学者であること、屋代は神道家であるが、もっと広い学問をしていると答えている。

さて寅吉が神誘いに逢った初めは七歳のとき、池之端茅町の境、稲荷社の前で売卜者を見ていてそれになりたいと思い、請い願ったが断られ、その後東叡山(寛永寺)の黒門前で遊んでいると、旅装束を着、髪をくるくると櫛巻きの如く巻いた老翁が口四寸ばかりの小壺から丸葉を取り出して売っていた。暫くして、老翁は帰り支度をして、壺の中に足を踏み入れたと思うと、身体中が壺の中に入り、大空に舞上って何処ともなく行ってしまった。その後何回となく同じ所に行き、夕方までいたけれども、老翁は現れなかった。諦めかけたが、思い直して、もう一度行ってみると、老翁が来ており、翁から寅吉に声を掛け、卜籠のことを知りたければ、

壺の中に入って自分と共に行けば教えてやるといわれ、壺の中に入る。そして日も暮れないうちに、南台嶽の頂にいた。幼児の事ゆえ両親を恋しがり泣き出したので、家に送り返してくれた。その時このことを誰にも語るなといわれ、もし又会いたければ日々五条天神の前に来いといわれ、その通りにした。毎日方々に連れて行ってくれたが、その内に段々家に送り返さぬようになり、七歳の夏より十一歳の十月まで五年間翁等と諸国を巡り歩いた。十一歳のとき家に帰され、両親は寅吉に出家を希望したので、それに従った。

文政二年(1819)に翁が現れ、共に行こうと言ったので、母親には、伊勢参宮に行くと言って師の国にいった。ここで翁に置いて行かれたので途方にくれていると、お坊さんに出会い神道を習いたいという白石丈之進という人を紹介してくれた。そこで蛭子流の神道の修行をした。そのうちに翁の弟の古呂明がきて翁の基に返ろうというので帰った。そこで又九月から三月まで色々と教えられる。家のことが気にかかるので翁に話すと、暫く家に帰れといわれ、その時翁の名は杉山組正、自分の名は、白石平馬といえと教えられる。

家に帰り、仕事をしようとしたけれども、《馬鹿馬鹿》と言われ、《役立たず》とも云われた。山に居たので世間の事はなにも分らない。また翁と共に山廻りをして修行をしていると、翁から近い内お前を理解してくれる人が現れるから心配するなといわれ、返された。その結果大人(篤胤)や屋代先生と会ったと言う。

寅吉は天狗の手引きによって「他界の界」を体験し「此の世界」に立ち返った少年である。江戸時代後期の人々はこの少年の彼方に異質な世界を見ようとする。

ところで、この化政文化の時代における民衆の好奇心は、人力を超えた不可思議な現象を放置することなく物化的日常事象と交流した。将に百鬼夜行の世界に住んでいたのである。その上高度な行動文化の時代でもあった。神



社・仏閣への参詣、開帳・縁日の盛行はじめ、その行動範囲は拡大して遠出する機会が多かった。その結果いろいろなことを知り、民衆は怪異を畏怖すると同時に歓迎する心を持っていた。当然篤胤もこのような空気の中で生活していた。

従って、篤胤に出会った寅吉はこれら異界に関心を有する人々に次々と質問をされ、寅吉もやがて見事な回答者となっていく。好奇の対照としての寅吉は仙童寅吉になっていく。そこから異界からの帰還者寅吉事件は、寅吉の背後にいる篤胤を山師といって誹謗・中傷・非難するような人も出てきたが篤胤は一切動じない。ところで篤胤は天狗についてどの様なものと考えていたのであろうか。篤胤の著したものを読むと、天狗について次ぎのようなイメージが浮かんでくる。万物は歳を経ると人の姿を借りて人を惑わすようになるという事が前提であるが、天狗の元は鳥獣であり数百年経って両翼を生じ飛行するようになり、姿は人面鳥身であり、人の目には殆ど見えない。往々人の生活に危害を加えるものであるようだ。また妖魔は、蕃国より佛と共に入ってきたもので、例えば地獄・極楽の類だという。

国学はもともと仏教を魔道として嫌うが篤胤は、その理由を仏教は色受相行識を蘊魔として退け、本来の人間性を無視する。若し人が皆仏門に入って戒律を守ったら、子孫が絶えてしまう。これは人道に反する事である。それに加えて、数多くの戒律はなかなか守れないので、その理由を妖魔の所為にするといい、それは卑怯な振る舞いだと考えている。

## 第五節 寅吉との会話

ここで『仙境異聞』から聞いた事、答えた事を取り出してみる。原文の通りではなく口語に私が訳した。

- 弘法大師は今もこの世に生きていますと聞く。寅吉は異界ではこのこと聞いた事があるか。

- そのような事は未だ聞いた事がない。
- 小田原最乗寺の道了権現と師は交際されるか。
- これらは真の天狗であるが、専ら仏道を崇拜する輩である。しかし師は交際することはない。委しきことは聞いていない。
- 狐を使う人が居ると聞いているが、如何に使うのか。
- 狐を使うには、狐を見立て、願をかけ、鼠を胡麻の油揚げにしてこれを与えると使って使うと聞く。これは邪法であると聞いている。
- 狐が人に取り付くと聞く。落とす手段はなからうか。
- 我儘の人か、心の虚ろな人が取り付かれ、化かされる。正しく心のしっかりした人には付くことも、化かすことも出来ない。
- 山に居たとき何か恐ろしきものを見たことはないか。
- 恐ろしき物と言うのは妖魔である。人の心の隙間を伺い、その道に引き入れる。これほど恐ろしき物はいない。
- 師の命ぜられたもので、難題なこととはどのようなものか。
- まず粟一合、小豆一升などの数を数えておき、線香の一本煙る間に、その粒を数えること、また長き葦を十間余りの簾に編みて葦を一本も潰さずに末より末へ渡り越せというとき。
- 其のとき寅吉はどうしたか。
- 師の命であるうから従う。粟を例にすると平らな板に隙間なく粟を並べ、一尺ばかりの絹糸を両手に引っ張り口に入れて唾を付け、それに粟をつけて数える。幾度となくそれを行った。大体師の云う数と合っている。
- 人の魂はどの様なものか師に聞いた事はないか。
- 人の魂は善にも悪にも凝り固まる。消えることはない。悪念の凝れる魂は消えるとき

がなく、妖魔の群れに入り、永く神明の罰を受ける。善念の凝れる魂は、神明の恵みを受けて、無窮に世を守る神となる。しかし善念は崩れやすく、悪念は崩れ難きものである。例えば一分の悪念を以って、九分の善念も水の泡となると師から聞かされている。

- 三月の節句の前日に節句の話を寅吉にしたところ、山にもあるというので、祭りの有様を聞いた。
- 三月の節句は伊邪那岐、伊邪那美両神の祭りである。神壇を作り、二神の霊代の幣をたて色々の供え物は別段変わりがないが、常と違っているのは、あさつきと片貝の酢味噌和えと櫛の葉に甘酒を付けて奉る。
- 甘酒は如何して作る。
- 飯を大変堅く炊き熱き間に麴を合せ、気の洩れないように蓋をして、置けばできる。それを臼にて引きて神前に立奉る。櫛の葉ごとにつける。紙雛・藁人形・桃の花はない。
- ある人に頼まれたが、その人は雷が鳴るのを恐れて、雷が鳴ると気絶する事がある。これを直す方法はないか。
- なるたけ高山に登り、穴を掘り、其の中に一夜入り、穴にある赤土を一掴み取り出して、古木の活根を切り土と共に紙に包み蓄えておき、雷の鳴ったとき臍の上にあて心を落ち着けると気絶しない。
- 深山・又は里でも悪魔・妖魔・猛獣などを除く呪いの術を知らないか。
- 呪いの術はあることは知っているが未だ習っていない。お守りは習っている。これは妄りに伝えるものではないが、私が今お札をつくるから、奇しこと、狼の類、悪獣に出会いたるとき、この札を散らす。特に獣には見えるようにその札を与える。
- 世間では兎は獣ではなく鳥であるからといって、高貴な人も食べる。山人は兎を食うか。

- 他の獣は食べないけれど、山でも兎は食べる。特に兎の頭上に人には甚だ薬となる肉があると言う。
- 寅吉の師は、信州浅間山の神に仕えられると聞く。神の御名は何と言われるのか。
- 浅間山に鎮座される神の御名は聞かないが、姫神にて富士山の神の御姉神である。しかし、御同体と聞いたこともある。
- 山人たちも盃事して祝う事があるか。
- 酒は人の心を蕩かして行いを損なうものである。普段は一切飲まないが、正月二日には酒宴がある。皆集まって昆布を肴にして少しずつ飲む。この時弓の射初めに藝目の舞があり、各々が舞う。
- 大天狗になれば、何時までも死なないのか。
- 二百歳、三百歳、また五百歳、千歳など色々定まっており、其の定まった歳数を封じて祭っておく。定まりの年数が終わると身を隠して神と成る。人間で言うところの死である。
- 一定の年数を如何して知るのか。
- 彼の境に入るときふと心に浮かんた歳数を筥に封じ其の上に幣を立て、日々拝む。私もあちら物と決まれば二百歳の齢である。
- 天狗の位はどの様にして定まるか。
- 行の重なるによって位が上がる。十二天狗のような大天狗は正一位の位である。
- 天狗は仏を信仰しないのか。
- 彼方は両部であるから、神棚に並べて両部の仏もかざるけれども、念仏は唱えない。朝神々を拝んだ後、西に向かって、西方牟尼ハン仏と唱え、桑の木を二尺ばかりに切りこれを投げる。牟尼ハン仏とは阿弥陀のことである。
- 鉄砲はあるか。
- 鉄砲はある。しかし火を用いない鉄砲であり、風の力で百匁の鉄の弾を三里撃ちはなつ。音は大きくない。

## 第六節 異界の意味

異界に住む人々は、江戸後期の人々の祈願に対して、それに答える現世に対する守護人であると考えられる。寅吉の師匠である杉山山人のような高位の山人は、神に代わって人々の信心に答える存在であり、場合に依っては現世の悪徳者に懲罰をも与える存在でもある。寅吉の住む世界がいかに異能・異類の世界であろうとも、近世幕藩体制の中の思想に立脚しておりそこからみだしてははいない。

杉山山人は現世の天子・將軍を崇敬し、寅吉を教戒するのである。天子・將軍は万国を鎮めて天下の人々に恵みを与え、天下を統治する人であるから大切に守護しなければならないという。現世の守護者である異界の山人は現世の政治家の守護者でもある。現世の秩序に従って幽界の神々もその分掌する仕事をする。寅吉も《そして山人・天狗に成りたいと言う人に対して、神を置きては世の中に人より貴きものはない。境界に住む山人天狗などを羨ましく思うのは心根の良くない考え方である。この世の人は当たり前のように事を務めて終わるのが幸福になる道である。》と説教をする。寅吉の語る異界・山人達は、神々と同様な神格性を備えた価値序列のある世界に住んでいるのである。これは篤胤の思想が寅吉に投影していると考えてもよからう。

篤胤にとって幽界・異界の問題は、彼の抱えている有力な思想的主題である。彼は寅吉の言から、大国主神が主宰する神霊の世界、幽界を見ようとする。そしてこの神霊・幽界の世界の存在を文献資料や伝聞などを証拠として、実証的に確認しようとする。寅吉の異界・山人の世界は、神道の世界でもある。

## 結 語

篤胤の思想は幽冥の事実を証明しようとする事から生じる。しかし幽冥界は実見することが出来ないの、篤胤は多くの解釈と説明によってそれを行おうとする。彼の解釈が「事実」によって支持されなければ、単なる物語となって

しまうからである。そこで彼は海外に伝わる伝説が、わが国の古伝と一致するとすれば、それだけで我が古伝の真実性が増し篤胤における「古伝・古史」が事実として承認されたという考え方に立つ。彼が後期に研究したのは、インド学であり、シナ学である。

『印度藏志』『黄帝伝記』『赤県太古史』『仙境異聞』等が挙げられようし、易学、曆学、制度論まで動員している。

『印度藏志』では、インドの阿修羅王の伝説は実は須佐之男命と大国主神が混合されて訛伝したものであり、帝釈天は邇邇藝命、大梵自在天神は産霊大神と伊邪那岐大神を混合した伝説であると論じられる。これらは篤胤の古伝を支持する事実の一つと考えられている。『赤県太古史』では、老子の「自然」をわが国の古典の「惟神」と同じであるとして上皇太一神は、天御中主神、盤古氏はインドでは梵天王だという。このような考え方はわが国にとって突飛なことではない。陽明学者で近江聖人と呼ばれた中江藤樹は、道教の神々を日本の神々同様と考えて、尊崇しているのである。篤胤はまた皇産霊神のこと、天皇・地皇とは、伊邪那岐・伊邪那美の二神、人皇は須佐之男命、太皇伏羲は大国主神で、天子と言われるのは邇邇藝命であり、シナの古説は日本と同じだとする。

『仙境異聞』は寅吉の詞の聞き書きである。篤胤は寅吉が《現身ながら幽冥に往還するもの》と信じている。

篤胤の思想は、既成の認知された世界の地平に立つのではなく、非合理的な情念の世界に住んでいるので、この情念で、世界像の整合的構成を作ろうとする。寅吉の世界を肯定するのは彼の思想からは当然のことである。彼の宇宙形成論の描く宇宙像の特色は、顕事と幽事の交錯にある。もっと具体的に言うと、公的政治世界の神である天皇と、郷土の世界の神である産土の神・祖霊との交錯とも考えられる。後者を補強すると篤胤は、民間で信じられていた天狗や化け物、神隠しや仙人に関心を示し、これを追

求したのである。もともと日本には、現実世界を超えるものを否定はしないが捉えることが出来ないというように理解していた。民俗学的にいうと、日本人の伝えてきた諸行事の中に流れていたものは、祖先の霊は何処かにあり、我々をそこから見守るものと理解されていたのである。これらの祖霊の考え方は、江戸時代の方が現在よりも、現実性を帯びていたであろう。篤胤は往々山師と言われるが、篤胤の立場は、奇怪で理性的には説明の出来ないような現象でもそれが現象である限り認めるという非合理主義者ではない。篤胤は自分の理論からそれが説明できるから認めるのである。思想的に云うと彼は、二元論に立つ合理主義者であるということが出来よう。

#### 引用文献

- (1) 田原嗣郎・関晃・佐伯有清・芳賀登・校注『平田篤胤・伴信友・大国隆正』日本思想体系12頁 岩波書店
- (2) 前掲 12頁
- (3) 前掲 17頁
- (4) 前掲 25頁
- (5) 前掲 28頁
- (6) 前掲 32頁
- (7) 前掲 40頁
- (8) 前掲 49頁
- (9) 前掲 52頁
- (10) 前掲 77頁
- (11) 前掲117頁

- (12) 平田篤胤『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波文庫 10頁

#### 参考文献

- (1) 旭市史編さん委員会 『旭市史』第2巻 1973年
- (2) 石川淳責任編集 『本居宣長』日本の名著 中央公論社1995年
- (3) 折口信夫『折口信夫全集』第二十巻 中央公論社 1996年
- (4) 子安宣邦 『平田篤胤の世界』ペリカン社 2001年
- (5) 子安宣邦 『宣長と篤胤の世界』中央公論社 1977年
- (6) 子安宣邦校注 平田篤胤『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波文庫 2000年
- (7) 相良亨責任編集 『平田篤胤』日本の名著 中央公論社 1997年
- (8) 田原嗣郎・関晃・佐伯有清・芳賀登・校注前掲『平田篤胤・伴信友・大国隆正』1973年
- (9) 山内昌之編 『世界の民族・宗教地図』日経文庫 1996年
- (10) 吉川幸次郎・佐竹昭広・日野龍夫・校注『本居宣長』日本思想大系 岩波書店 1978年
- (11) 和辻哲郎『日本倫理学思想史』下 岩波書店 1952年